

熊本市長「民間活用の防災計画を」

県まちづくり技術センターなど 防災特別講演会開く



講演会は、災害復旧の専門家として被災地に派遣される「県防災エキスパート」の研修会に位置づけた。兵庫県や市町役場で土木分野を担った技術職OBらがボランティアで支援活動を展開する

松岡市長は講演で、「ダムに頼らない治水策を講じてきたが、想定を超える激しい大雨だった」とし、被害要因の一つとして計画の白紙撤回などで川辺川ダムが完成に至らなかったことを挙げた。

また、当時の状況について「家の二階まで浸水し、机の上に乗って命から助かった人も多かった。これだけの雨が降れば、どこでも同じ被害が起こりうる」と治水の限界を強調した。

住民の避難意識について、「最大の水害だった昭和40年の洪水を念頭に、これを超える災害は起きないだろうという認識の甘さがあった」と反省。災害が発生する前に高齢者等避難や避難指示を発令することに改めた。

難。いかに行動するかの対応を考え、安全安心をさらに前進させるべき」と求めた。

県まちづくり技術センター、県土木職OBでつくる「白会」、兵庫7人による令和4年度防災特別講演会が4日、神戸市産業振興センターで開かれ、約260人が参加した。令和2年7月豪雨で球磨川が氾濫し、甚大な被害を受けた熊本県人吉市の松岡隼人市長が講演し、「防災計画は役所の都合に合わせて作りがちだが、民間施設の活用を含めた現実的な計画づくりが大切」と官民の役割分担を訴えた。

制度で、阪神・淡路大震災の教訓から平成10年に

令和2年7月「豪雨教訓伝える」同じ災害でも

況について「家の二階まで浸水し、机の上に乗って命から助かった人も多かった。これだけの雨が降れば、どこでも同じ被害が起こりうる」と治水の限界を強調した。住民の避難意識について、「最大の水害だった昭和40年の洪水を念頭に、これを超える災害は起きないだろうという認識の甘さがあった」と反省。災害が発生する前に高齢者等避難や避難指示を発令することに改めた。

創設。今年7月現在で156人が活躍している。同センターの寺谷毅理事長はあいさつで、避難中に流されて犠牲者を出した平成21年の佐用町豪雨災害にふれ、「目的の地にたどり着くまでが避る」と意欲を示した。